

究の中心的存在でありつつ、「文芸春秋」誌上で徳川時代をテーマとした「将軍の世紀」を連載中。4月30日解説面では、世界と日本の歴史を比較して複眼的に事物を観て真理に迫ります。徳川時代260有余年の戦い亡き平和の時代、権力と権威の絶妙な関係があったのですね。

令和の 衣食住

読売朝刊くらし面ではこうなるであろう「令和のくらし」が紹介されておりました。第1回目は「培養肉」。本来の触感を残した「肉とは異なるもの」が出現しそうです。中でも注目は着るだけで健康診断が出来る進化する服、ティジンフロンティア「マトウス」。

インターネットと繋がる「スマートウェア」の開発にも注目。「アンリアレイジ」のデザイナー森永邦彦さんは「これからの服は、様々な情報を感じ取る新しい皮膚に成る」といっているそうです。進化することは良いと思いますが情緒や風情がなくなってしまうのでは…と心配です。

佐倉在住グラミー賞受賞サクソ奏者 佐藤洋祐エッセイ「ドラゴンへの階段」始まりです！

ドラゴンへの階段 第1回

〈エッセイ版〉

佐藤 洋祐

こんにちは、初めまして！ミュージシャンの佐藤洋祐（さとうようすけ）と申します。これからYOMIURIつうしんに私の連載エッセイを掲載させていただきたくにあたり、私のこれまでの略歴を皆様に紹介させていただきたいと思ひます。

私は東京の下町に生まれ育ち、それから大学への入学を機に北海道札幌市に住み始め、卒業後8年間のお勤め生活の後に脱サラ、ジャズサクソ奏者として札幌のジャズクラブなどで演奏し音楽で生計を立てるようになりました。それから約5年後にアメリカはニューヨークで音楽活動をはじめましたが、8年ほどニューヨークに居を構えていたもののその後半年間の300日以上を演奏ツアーしている生活で、それならば日本の国際空港の近くに住みツアーを続けようと、2015年の初夏に現在の住まいのある千葉県に引越してまいりました。ツアー先の海外より戻り、ほんの僅かの間に満喫する日本は素晴らしく、やはりこの国で生活し音楽活動をしたいと思うようになりました。ツアーのバンドを辞して日本での活動を再開したのが2015年の暮れ。私はアメリカでの音楽活動を通じて幸運にもグラミー賞を2度いただくことができたのですが、2度目は日本に活動を戻してからいただいたものでした。2015年の秋に日本よりニューヨークへ飛んでレコーディング参加したアルバムが受賞したため、その知らせを聞いた日本の新しい友人たちがこそって喜んでくださり、誇らしく幸せな気持ちに満たされたこと、そしてますます日本での音楽活動に明るい希望を抱いたことをよく憶えています。



何かこうして振り返ると、いろいろなことがあったな、と。15年前までは、私はお屋のお勤めをしていたんですけどね。音楽とは特に関わりない環境に育ちましたので（父は表具・内装の職人、母は主婦です。私の一つ上の兄は父と一緒に働いています）、音楽はすべて独学で学んでまいりました。サクソ奏者として生計を立て始めるまでも、その後海外で活動をしてからも、現在に至るまでフォーマルなレッスンというものは一度も受けたことがないんです。レコード、CDや本、出会った人とお話しをして学んだり、そうやって自分の好きなことだけを、自分なりに消化できるまで時間をかけて表現手段として身に付けてこられた、とても贅沢なこれまでの音楽人生！これは全て、どんな時でも私を支えてくださった方々のおかげなのです。一番最初に主体的に手にした楽器はギターで、それはただ家に弾かれず放置されたガットギターがあったから。中学生くらいからのめり込むようになり、ただただギターを弾くことが好きでいつも練習しておりました。のめり込んだ楽器はその後トランペット、そしてサクソ

ス、ピアノ、フルート、クラリネット。

いま一番時間を費やしているのは歌ですが、昔から私が音楽表現を身に付けるプロセスは同じ、「好きなことを、自分なりに消化できるまで時間をかける」、です。それを可能にして許してくださる環境、ご縁に、感謝の心をおさえることができませぬ。

挿絵 TAKAKO



佐藤洋祐